

# 大学生の親密な関係破綻後の思考・感情と対処方略に関する検討

——潜在的な攻撃性に注目して——

21001FRM 尾邊純一

キーワード：親密な関係破綻，ソーシャルサポート，P-F スタディ

## 1. 問題と目的

ストーキング行為を増加させる要因として、金政他（2018）では関係破綻後の思考や感情を挙げている。そこで、本研究では親密な関係破綻を取り上げ、関係破綻後の思考・感情に注目し、関係破綻後の対処方略を検討する。また、親密な関係破綻後の対処方略を検討するうえで、社会的要因を考慮することは重要であると考えられる。関係破綻後の回復と精神的健康についてソーシャルサポートの検討が重要と指摘されている（山下・坂田, 2008）。そこで、ソーシャルサポートの影響にも注目する。一方、親密な関係の破綻とは、個人にとっての強い欲求不満体験となるため、そのような欲求不満に対する個人の反応の仕方が問題となるであろう。そのため、本研究では、敵意を含めた関係破綻後の行動や攻撃性についてP-F スタディを用いて質的に検討していく。そこで、質問紙調査によって、親密な関係破綻後の思考・感情と対処方略に関する全体的な傾向を明らかにし（研究1）、個別の心理検査によって潜在的な攻撃性が不適切な対処方略に与える影響を明らかにする（研究2）。

## II. 研究1

### 1. 目的

ソーシャルサポートの観点から親密な関係破綻後の思考・感情と対処方略に関する全体的な傾向を明らかにするため、次の仮説を検討した。①関係破綻後の思考感情に対して、情緒的サポートがある場合には肯定的解釈のコーピングが高くなる。②ソーシャルサポートは関係破綻後の思考感情を低減させ、その影響で関係破綻後のネガティブな対処行動への影響は低くなる。

### 2. 方法

1) 研究協力者：大学生および大学院生 120 名（男

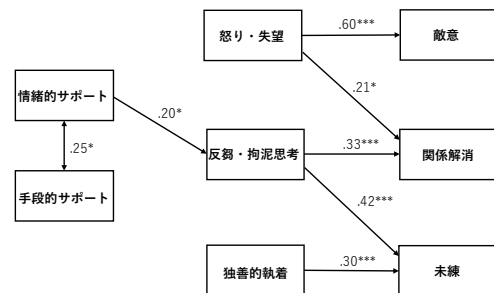
性 31 名，女性 89 名，平均年齢 21.41 歳， $SD = 1.39$ ）が協力した。

2) 手続き：大学の講義時間を使用し、質問紙調査を行った。また WEB 調査を併用した。

3) 質問紙（WEB フォーム）の構成：①フェイスシート：性別，年齢。②親密な関係破綻の思考や感情測定尺度（金政他, 2018）の 10 項目，5 件法。③失恋コーピング尺度（加藤, 2005）の 36 項目，5 件法。④ソーシャルサポート尺度（福岡・橋本, 1997）の 12 項目，5 件法。⑤個別心理検査への依頼書。

### 3. 結果と考察

$t$  検定の結果から性差が見られたため、男女別で構造方程式モデリングを行った。女性モデルの適合度は  $\chi^2(30)=30.94$ ,  $p=.42$ ,  $GFI=.994$ ,  $AGFI=.865$ ,  $CFI=.995$ ,  $RMSEA=.016$  と十分な値が得られた。研究2の参加者が女性のみであるため、ここでは女性のパス図のみを示す。



\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$   
関係破綻後の思考や感情の3因子の誤差変数間ならびに失恋コーピング尺度の5因子の誤差変数間にも相関を仮定した。  
誤差変数は図から省略した。注：有意なパスのみ記載  
 $\chi^2(30)=30.94$ ,  $p=.42$ ,  $GFI=.994$ ,  $AGFI=.865$ ,  $CFI=.995$ ,  $RMSEA=.016$

図1 女性の関係破綻におけるモデル図。

仮説モデルを検討すると、①の仮説は支持されなかった。しかし、情緒的サポートが反芻拘泥思考を媒介し、関係解消に影響を与えていた。それは、情緒的サポートが関係破綻後に一時的に反芻拘泥思考に陥ることで、相手との関係を解消しや

すくしている可能性が示唆された。仮説は指示されなかったが一部、情緒的サポートのポジティブな影響を示した。

また、②の仮説も支持されなかった。女性の場合、情緒的サポートを得ている度合いが強いと親密な関係破綻後に反芻拘泥思考が起りやすくなり、それが関係解消というコーピングに影響を与えることが示唆された。一方、男性では反芻拘泥思考には手段的サポートが影響を与えていた。情緒的サポートは感情には影響を与えておらず、関係解消に直接影響を与えていた。男性も女性同様にソーシャルサポートが親密な関係破綻後のネガティブな感情を低減する要因ではないことが示唆された。しかし、反芻拘泥思考を媒介することで関係を解消する可能性は示された。他方、男女ともに、怒りと敵意、反芻拘泥思考と未練といった行動の背景に潜む感情との関連は強く示される結果となった。

### III. 研究2

#### 1. 目的

研究1では情緒的なサポートが関係破綻後の思考感情に与えるポジティブな影響が量的には示されなかったことに加え、怒り失望の感情と敵意という対処行動の関連が強く示された。このことから、研究2では情緒的なサポートの影響を質的に検討することと、怒り失望と敵意の関連を攻撃性という観点から検討することを目的とする。

#### 2. 方法

1) 研究協力者：研究1で個別の心理検査への協力を承諾した女性19名を対象とした（平均年齢21.55歳,  $SD = 1.54$ ）。

2) 手続き：大学内の心理面接演習室にてP-Fスタディを実施した。

#### 3. 結果と考察

P-Fスタディの結果、敵意が高い者は他責群に多く、敵意が低い者は自責群に多く、無責群には敵意の高い者と低い者の両方が見られた。自責群では怒り失望が低い者は敵意も低いことが多かった。この結果から自責群では攻撃性を自己に向けるため、怒り失望と敵意が低くなったと推察された。また、情緒的サポートの得点が高い者は怒

り失望と敵意が低い傾向が見られた。この結果から、情緒的サポートを多く受けていると知覚している者ほど、相手に対して、攻撃性を向けることが少なくなるのではないかと推察することができた。情緒的サポートの得点が低い者は相手に攻撃性を向ける反応が多かったが、情緒的サポートの得点が高い者は攻撃性を相手に向けるだけでなく、その後に起きた事象に対して解決しようとする反応が多く見られた。このことから、情緒的サポートは欲求不満な場面において、ポジティブな影響を与えていることが推察された。

### IV. 総合考察

研究1および研究2の結果を、関係破綻後の思考・感情と対処方略および攻撃性から考える。関係破綻後の感情として怒りが高くなるほど対処方略としての敵意も高くなり、その人の攻撃性が自分に向く場合は関係破綻後の感情として怒り失望が低く、対処方略としての敵意も低かった。この結果から、親密な関係が破綻するという欲求不満ストレスの高い状況において、攻撃性を自己に向ける傾向が高い者は怒りを攻撃的な形で相手に表出することが少なく、逆に攻撃性を他者に向ける傾向が高い者はそうした状況において相手に対して攻撃的になることでその状況に対処することが示唆された。一方、敵意が低い者は欲求不満ストレスの高い状況において、自分の非を認めることが多くなると考えられる。女性では情緒的サポートを受けている者ほど相手のことを考えすぎるが故に未練がましくなることや、逆にそのことが苦痛になるため相手を避ける対処行動を行うといった影響が示唆された。一方、欲求不満ストレス状況において体験される攻撃性を自分に向ける人でも、情緒的サポートを知覚している人は怒り失望が低い傾向が窺われ、情緒的サポートが関係破綻後の思考・感情にポジティブな影響を及ぼす可能性が考えられる。性別により与えるソーシャルサポートを変え、サポートを多く知覚することができるかと欲求不満を抑えることができると推察された。そのため、欲求不満を抑えることができると、ストーキング行為も減少するのではないかと考えられた。